

ベイベリケーンおばあさんとスギナ姫

むかしむかし、ベイベリケーンというおばあさんが五頭の牛を飼ってくらしていました。おばあさんは、牛のミルクをしばって、飲んだり、バターをつくったりして毎日くらしていました。

子牛が生まれる時期になりました。

ある朝、牛たちの様子を見るために小屋に入ると、なんと牛が一頭もいません。困ったベイベリケーンおばあさんは、野原に牛を探しに行きました。しばらく歩くと、大きなカラスが枯れた木の枝にとまっています。

「カラスさん、わたしの牛たちが五頭ともいなくなってしまったの。おまえさん、見なかったかい？」

すると、その大きなカラスは、

「カーカー！ 知っていても言うものか、カーカー！ 牛のえさのワラをとられないようにって、お前さんがぼくに木の枝を投げたから、今も背中が痛いんだ！」

おばあさんは先へ歩いていきました。しばらくすると、空をタカが飛んでいました。

「タカさん、わたしは五頭の牛を探して、足のうらにタコができるぐらいたくさん歩いているの。空を飛んでいるおまえさんなら、わたしの牛たちを見やしなかったかい？」

するとタカは、

「チュルップ・チャリップ！ 知っていても、教えないよ！ おまえさんは、わたしにえさをくれるどころか、かわいた牛のフンを投げて追い払ったのだからね。チュルップ・チャリップ！ ぜったいに教えないよ！」

ベイベリケーンおばあさんは旅を続けることにしました。しばらく歩くと、大きなカラマツの木のでっぺんにワシがとまっているのが見えました。おばあさんはワシに聞きました。

「目のするどい、耳のいいワシさん！ 雲の上を飛んでいるおまえさんなら、わたしの牛がどこにいるか、知っておいでだね！ たのむから、教えてちょうだいな！」

するとワシはこう答えました。

「ああ、知っているよ！ ここから東に向かって歩きなさい。するとキツネのいる草地があるでしょう。そこに大きな丘があって、その上に大きな木が立っている。その木の根はどこまでも深く地下の世界にとどいていて、その枝は地面にまでたれさがっている。その枝の下でおまえさんの牛は五頭とも、子牛を生んで休んでいるよ！」

ベイベリケーンおばあさんは、ワシにお礼を言っ、東に向かって歩いていきました。二日も三日も歩いて、やっとワシに教えてもらった丘にたどりつきました。見ると、言われたとおり、五頭の牛も子牛たちも枝の下で休んでいました。おばあさんはほっとしました。そして、牛たちをつれて帰ろうとしましたが、そのとき、その大きな木の下に、めずらしい葉っぱのスギナが生えていることに気がつきました。

「なんて、きれいなスギナでしょう！ 家にもって帰って、かわいがってあげましょう！」



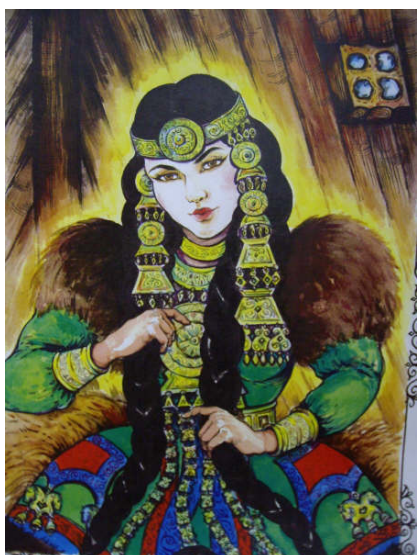
そう言うと、ベイベリケーンおばあさんはスギナを、そうつと抜いて、大切にわきの下にかかえて家にもって帰りました。

家に帰ってきたおばあさんはスギナをふとんにくるんでおき、自分は乳しぼりに出ました。子牛を生んだ牛たちはたくさんミルクを出すので、おばあさんはうれしくなりました。二頭目の牛の乳しぼりを終えたとき、家の中から指ぬきが床に落ちる音が聞こえました。びっくりしたおばあさんはしぼったミルクがこぼれるのもかまわず、急いで家に入りました。見ると、スギナはふとんに入ったままで、部屋の中にはなにも変わった様子はありません。

おばあさんは、ふしぎに思いましたが、また、乳しぼりをしに外へいきました。と今度は、床に針が落ちる音がします。また、びっくりしたおばあさんは、バケツからミルクがこぼれるのもかまわず、もう一度、家の中に飛びこんで、様子を見ました。でも、なにも変わった

様子もなく、ひろってきたスギナもふとんの中でした。

おばあさんはまた乳しぼりにもどりました。しばらくすると、家の中からガチャンとハサミが落ちる音が聞こえてきました。またもや、



びっくりしたおばあさんが家の中に飛びこむと、なんと、ベツドの上に、ことばでは言いあらわせないようなうつくしいむすめが座っていました。肌は雪のよう

に白くて、血管がすきとおって見えるほどで、まゆ毛は二匹のミンクを合わせたようにきれいで、目のひとみは熟したブルーベリーのようにまっ黒でした。服にはししゅうがあつて、金や銀のかざりがついていました。このうつくしいむすめは、あのスギナが変身した姿なのでした。

こうしてベイベリケーンおばあさんにはむすめができて、幸せにくらすようになりました。

何年もたって、スギナ姫は心のやさしい、美しいむすめに育ちました。

ある日、ベイベリケーンおばあさんの家の近くの森で、ハラ・ハー

ンという金持ちの息子が狩りをしていました。一日中、森で追いまわされていたリスは、ベイベリケーンおばあさんの庭へにげてきて、木に上りました。それをねらってハラ・ハーンの息子は矢をはなちましたが、矢はずれて、ベイベリケーンおばあさんの家のえんとつの中に落ちてしまいました。困ったハラ・ハーンの息子は、大きな声で言いました。

「ねえ、ベイベリケーンおばあちゃん、ぼくの矢を取っておくれよ！」
けれども、家の中からは返事がありません。ハラ・ハーンの息子は、もういちど大きな声で言いました。

「おい、ベイベリケーンおばあちゃん！ ぼくの矢があなたの家のえんとつの中に落ちたんだ！ 取ってくれませんか？」

家の中からは返事がありません。そこで、ハラ・ハーンの息子は家のなかに飛び込みました。すると目の前には、肌が雪のように白く、血管がすきとおって見えるほど、まゆ毛は二匹のミンクを合わせたようにきれいで、目のひとみは熟したブルーベリーのようになまっ黒なうつくしいむすめが座っているではありませんか。そして、彼女の美しさのために、部屋の中はまぶしいぐらいなのです。

ハラ・ハーンの息子は、あまりのうつくしさにびっくりして気を失ってしまいました。スギナ姫も「なんと美しい若者でしょう」と思いました。二人ともおたがいに一目で好きになってしまったのです。気がついたハラ・ハーンの息子は急いで馬を走らせると、両親にベイベリケーンおばあさんの家にいる美しいむすめの話をしました。両親は

大よろこびでけっこん式のしたくを始めました。次の日、ハラ・ハーンの息子はベイベリケーンおばあさんの家に、おばあさんの庭をすっかりうめつくしてしまふほどたくさんの牛と馬の群れを連れてきました。それは、両親からのけっこんのおくりものなのです。スギナ姫は花よめ衣装に着がえると、まだらの馬に乗ってハラ・ハーンの息子といっしょに旅立ちました。

しばらく森の中を行くと、リスがでてきました。狩りが大好きなハラ・ハーンの息子は、どうしてもリスを追いかけたくまりました。そこで、スギナ姫にこう言いました。

「ぼくは狩りをしてくるから、あなたはこの道をまっすぐ行きなさい。とちゅうの分かれ道には、東がわの木に山ネコとミンクの毛皮がはつてあつて、西がわにはクマの毛皮がかかっている。あなたは東の道を通って行くんだよ。ぜったいに西がわに曲がってはいけないよ」

そういわれたスギナ姫は一人で旅を続けることになりました。分かれ道にさしかかると、注意されたことを忘れてしまい、スギナ姫は西がわに曲がってしまいました。そのまま、しばらく馬を走らせると、大きな鉄でできたテントが見えました。スギナ姫が休もうとして馬を止めたとき、その鉄のテントからアバフお化けのむすめが出てきました。その体は鉄でできていました。手は折れまがった一本だけ、足も折れまがった一本足で、おでこにはフナのスープのようににごった、ぼんやりと光る恐ろしい目がひとつありました。そして、へビのよう長い舌は胸までたれ下がっていました。お化けむすめはスギナ姫を

馬から引きずりおろすと、自分がスギナ姫の花よめ衣装を着ました。そして、スギナ姫の顔の皮を長いつめで切りとると、自分の顔にはりつけて、スギナ姫のまだらの馬に乗ると、ハラ・ハーンの国へかけていきました。

ハラ・ハーンの息子が花よめを両親の家につれて帰ったというので、美しい花よめを一目見ようと国中からおおぜいの人びとが集まってきました。

お祝いのぎしきが行われる広場では、馬をつなぐ柱（セルゲ）の左がわに九人のうつくしいむすめが、右がわには九人のうつくしい若者が立っていました。ところが、にせの花よめは馬からおりと、さつさと自分で馬を引いて、やなぎの細い枝につないでしまいました。九人のうつくしい若者は、花よめの銀のたづなを受けとるために待っていたのですから、がっかりしてしまいました。花よめの銀のむちを受けているために待っていた九人のうつくしいむすめたちも、がっかりしてしまいました。集まった人びとは、花よめのれいぎ知らずなふるまいにびっくりしてしまいました。

つぎに、花よめがしゃべって、口からビーズが落ちてくるのを、糸を手にして女の子たちが待っていました。花よめが歩いたあとからミンクが走り出すのを、弓を手にして男の子たちが待っていました。ところが、にせの花よめが集まった人びとの方へ歩き出すと、その足あとからは毛のぬけた白テンが走り出しました。花むこの両親にあいさつをしようと口を開くと、たくさんのカエルがゲコゲコなきながら、

ポロポロ地面に落ちてきました。国中からあつまつた人びとは、それを見てがっかりしてしまいました。それでも、しかたなくけっこんのお祝いをしました。

そのころ、ベイベリケンおばあさんは、牛たちを探しに野原に出ていました。見ると野原に、あのスギナが、また咲いているではありませんか。おばあさんはスギナをそうとと抜くと、たいせつにわきの下にかくして、家に持ってきてベッドの上に置きました。乳しぼりの時間になったので、おばあさんが出かけると、家の中からチョコキチキとハサミの音が聞こえました。おばあさんはびっくりして、しぼったミルクがバケツからこぼれるのもかまわず、家の中に飛びこみました。見ると、ベッドの上に前よりもっと美しくなったスギナ姫がすわっていたのです！

スギナ姫は、自分の身に起きたおそろしいできごとをすっかりおばあさんに話しました。そして、

「服を取られ、顔の皮を切りさかれて、骨だけになったわたしを犬が食べ、わたしの肺としんぞうを野原まで持って行って、そこにうめてくれました。それで、わたしはまたスギナによみがえることができました。わたしは、ハラ・ハーンの国の人を増やすようにと決められた運命なのです。あのお化けむすめは、今わたしに化けてわたしの夫の体と心をけがして、国の人びとを食べてしまおうとしているのです！」と泣きました。

ところで、みなさんは、花よめのまだらの馬をおぼえていますか？あの馬は、人間のことばを話すことができる、ふしぎな馬でした。スギナ姫がよみがえったことを知ったまだらの馬は、ハラ・ハーンのところに行く、こう言いました。

「お化けむすめはわたしの主人のスギナ姫を殺すと、顔の皮を自分の顔にはりつけ、花よめ衣装に身を包み、あなたの息子の花よめになっています。ほうっておくと、息子も国の人びともみんな食べられてしまいます。どうぞ、あのお化けむすめをつかまえて、野生の馬のしっぽにつないで野原に放してください。そして、三十日間、川の流れる水であなたの息子の体を清めてください。三十日がすぎたら、川から出して、いちばん高い木のいちばん太い枝に三十日の間ぶらさげてください。そうすれば、体と心にしみこんでしまったけがれも虫もとれるでしょう」

こうして、お化けむすめは野生の馬のしっぽにつながれ、走る馬にけられて死んでしまいました。そのとき、体から出た血が、ヘビやそのほかの虫になって今も生きつづけています。

そして、ハラ・ハーンの子は三十日の間、川の中で過ごして、北と南から吹いてくる風で体を清められ、それからまた三十日の間、木の上で過ごしました。そうして、骨と皮だけになった息子はようやく家に連れてこられ、元気をとりもどしました。

元気になったハラ・ハーンの子は、前よりもっとたくさんのおくりものを持って、ベイベリケーンおばあさんのところに行く、あらためてスギナ姫をおよめさんにもらいました。スギナ姫は花よめ衣装を着て、銀のくらに乗って、銀のたづなと銀のむちを持ち、ハラ・ハーンの子の国に出発しました。ハラ・ハーンの子の国に着いて、馬から下りて歩きだすと、足あとからミンクがたくさん走り出したので、それを男の子たちは弓で射て遊びました。人びとにあいさつをしますと、口からは宝石のようにかがやくビーズが雨のように落ちてきたので、それを女の子たちは糸に通して、首かざりを作って遊びました。

それから、家の前に九十頭の子馬をつなぎ、家の右がわに馬をつなぐ柱を立てて、それに九頭の白いオスの馬をつなぎました。家の左がわには八本の柱を立てて八頭のオスの牛をつなぎました。それから、九人の白いシャマン*をまねいてぎしきを行いました。スギナ姫とハラ・ハーンの子のけっこんのお祝いに、天の世界からも、中の世界からも、地下の世界からもたくさんのお客がやってきました。

*シャマン!!サハの人びとのあいだで、いろいろなぎしきをする人。

道に迷った兄弟

むかしむかし、とても貧しいおじいさんとおばあさんがいました。ふたりには、三人の息子がいて、みなで狩りをしてくらしていました。ある日、兄弟は森へ狩にいつて、道に迷ってしまいました。火をおこすことができなかつたので、何日も何も食べるできませんでした。火をおこすことができませんでした。何日も何も食べるできませんでした。火をおこすことができませんでした。

そうして森を歩いていると、ある夜、森のむこうに火が見えました。兄弟はうれしくなつて、だれが見に行くのか、話し合いました。そして、一番上のお兄さんが、いったい何の火なのかを見に行くことになりました。

お兄さんが行つてみると、テントほど高い大きなたき火の前に、雪のようにまっ白なかみの毛とひげのおじいさんが、鉄のつえを持つてすわっていました。

お兄さんが、

「おじいさん、ぼくたちは何日もあたたかい食べものを食べていなくて、ひもじいのです。ぼくたちに火をください！」

と言いますと、おじいさんは言いました。

「今まで聞いたこともないような、でたらめなほら話をしてくれれば、火をあげよう」

お兄さんの頭には何の話も思ひつかびませんでしたし、おじいさんがいかにも弱そうに見えたので、火のついたたきぎを一本、手にとる

と、弟たちのいるほうに走りだしました。おじいさんはすぐに追いかけてきて、鉄のつえでお兄さんをなぐると、たきぎを取り戻しました。

お兄さんが帰つてきて、弟たちに話すと、二番目のお兄さんは、「お兄さんは、九十才近い頭がぼけたじいさんから、たきぎ一本も取ることができなかつたのか。なさけない！」

と言つて、おじいさんのところに行きました。

「ねえ、じいさん、ぼくたちに火をおくれよ！」

そう言うと、おじいさんはまた同じ言葉をくり返しました。二番目のお兄さんも、何も話さないで、火のついたたきぎを一本、手にとつて走りだしました。おじいさんはまたもや、追いかけてきて、鉄のつえでなぐると、たきぎを取りもしました。

火を持つてくることができなかつた二番目のお兄さんが、帰つてきました。すると、一番下の弟は言いました。

「二人とも、ぼくより長く生きてきたのに、作り話のひとつもできないなんて！」

そこで、こんどは一番下の弟が、雪のようにまっ白なかみの毛とひげのおじいさんのところに行つて、たのみました。

「おじいさん、ぼくたちに火をくださいませんか？」

すると、おじいさんは言いました。

「今まで聞いたこともないような、でたらめなほら話をしてくれるなら、あげてもいいよ」

そこで、この弟は元気いっぱい声で話をはじめました。

「むかし、ぼくの父さんと母さんが生まれる前、ぼくはベリーをとり
に森に入って、道に迷ってしまったのさ。何日も何日も歩いてるう
ちに、どこかの川に着いた。この川をどうやって渡ろうかな？ と考
えてね、自分の耳を自分でつまんで持ち上げると、そのままくるく
ると回して、自分の体ごと川の反対がわに投げたんだ。すると、耳がパ
タパタと、カモのつばさのような音をたてたんだ。そうやって、ぼく
は向こう岸に飛んでいけたんだけど、体がすっぽり地面にはまって
しまつてね、目から上だけ地面に出ていたんだ！ 大変なことになっ
たなあと思っていると、一羽のシギが、ぼくのそばを走って通りすぎ
ようとした。その鳥のしっぽにつかまったおかげで、ぼくの体は地面
からぬけて、助かったのさ。ところが、そのばか鳥は、ぼくをそのま
まひっぱって飛んでいって、一本の枯れたカラマツの木の上にとまっ
たのさ。それで、ぼくはその枯れたカラマツの木の幹の穴にどすんと
落ちてしまったんだ。しばらく穴の中にいたら、青い空をカーカーと
なっていたまっ黒いカラスが、ぼくをめがけて、さっと飛びおりてき
て、穴のそばにとまったんだ。そこで、ぼくはそのカラスのしっぽを
つかんだのさ。カラスはびっくりして、さっと高い空に向かって、ぼ
くが生まれた国よりも、もっとたくさんの木や草がしげっている国で
ぼくを下ろすと、また、カーカーとなきながら下の方にさっと飛んで
消えてしまった。ぼくは、どうやって自分の国に戻ろうか？ と、ま
いごのカモのひなのようにばたばたしながら考えていると、一人のお
じいさんがやってきて、『ねえ、おまえさん。麦わらをあんで、ひも

を作つてごらん。そのひもを使えば、下の国にすつと下りられるよ』
と言つて、ぼくに麦わらを一たばくれたんだ。その麦わらでひもを作
つて、できあがつたひものはしをおじいさんに持つてもらうと、ぼく
はそのひもをつたつて、下にすつと下りたのさ。ところが、ひもの長
さが足りなかったので、ぼくは空と地面の間にぶら下がってしまった。
上に上るにも、下に下りるにも、ぼくには羽がない。しかたがないか
ら、手をはなしたのさ。そして、何かの上にドスンと落ちて、気が遠
くなつてしまつたんだ。気がつくとき、春のツンドラの草の上で、気持
ちよくねていた、こわいクマの上ののっかっているじゃないか！ ク
マはかわいそうにびっくりして、『助けて！』と、ほえながら、黒い
森の中へ走り出したんだ！ こうして、すんでのところ、ぼくは生
きているのさ！」

と、一番下の弟は話を終えました。

まっ白なかみのおじいさんは満足そうにほほえみながら、弟をほめ
ると、火をくれましたとき。

とんち者の貧乏人 びんぼうにん

むかしむかし、サーバという一人の貧乏人が狩りをしてもらいました。ある年の春、渡り鳥が南のほうから戻りはじめたとき、狩りに行ったサーバには、たった一羽のガンしかとれませんでした。

「どのみち、こんな小さい肉では足りないな」
と思ったので、そのガンを、となりの金持ちの家に持っていきますと、とても喜んでむかえてくれました。

この金持ちは、サーバが貧乏人ながらも頭がよくまわる男だ、と知っていました。そこで、貧乏人のちえを試してみようと思って、こう言いました。

「まだ渡り鳥が少ない今の時期に、この一羽のガンを持ってきてくれて、わしはうれしい。しかし、一つだけ困ったことがある。わしは妻と、二人の息子と二人のむすめの六人でくらしている。どうすればわしら六人は、この一羽のガンをけんかししないで食べられるだろう？ 不公平にならないよう、お前に分けてもらいたい」

すると、貧乏人のサーバは答えました。
「あなたは家長で、いつも家族の先頭に立っていますから、ガンの頭の部分をめしあがるのが、いいでしょう。あなたの奥さんはずっと家にいますから、すわる部分、つまりガンのおしりの肉がいいでしょう。息子さんたちはお父さんのあとつぎですから、『足あとをふむ』とい

うことで、足を一本ずついいでしょう。むすめさんたちは、いつでもこの家からおよめに飛び出ていけるように、『羽の毛づくろいをして、おしやれをしている』ので、手羽を一本ずつがいいでしょう。そして、この丸くて何の意味もない、肉だらけのむねの部分は、わたしのような、何の役にも立たない人間にちようどいいでしょう」
これを聞いて満足した金持ちは、たくさんのお金や食べ物をほうびに与え、貧乏人のサーバを見送りました。

貧乏人のサーバの話聞いて、うらやましくなったのは、となりに住む男です。彼は五羽のガンをとって、自分のおくさんに煮てもらおうと、それをもって金持ちの家に行きました。すると、金持ちは、この男のよくばりな心を見ぬいて、あまりよろこびませんでした。それでも、貧乏人のサーバにたずねた質問を、この男に聞いてみようと思っ

て言いました。
「わしには、妻と二人の息子と二人のむすめがいる。どうすればわしら六人は、この五羽のガンをけんかししないで食べられるだろう？ 不公平にならないよう、お前に分けてもらいたい」

よくばりの男は、あれこれ考えて、なんとかして分けようとしたが、どうにもわからなかったので、金持ちに怒られ、追い出されてしまいました。

五羽のガンをもらった金持ちは、貧乏人のサーバのことを思い出しました。あの男ならどうやって、この問題をとくのだろうか、思うと楽しみで、サーバをよびだすことにしました。

すると、貧乏人のサーバはこう言いました。

「ご主人さまと奥さまの二人で一羽をめしあがっていただきます。そうすると、二人と一羽ですから、二たす一で三になりますね。二人の息子さんにも一羽をあげると、二たす一で三になります。二人のむすめさんにも一羽をあげると、同じように三になります。そして、残った二羽をわたしにくだされば、わたしのほうも一たす二で三になります。どうですか？ みんな同じになりますね？」

金持ちは前よりもっと楽しい気分になって、ほうびとして、とてもなくさんのお金や小麦や食べ物くれました。

その日から、貧乏人のサーバは、みんなから「とんち者のサーバ」とよばれるようになりましたとさ。

ずるがしこいキツネと鳥たち

むかしむかし、コウノトリが大きなカラマツの木のの上に巣をつくって、ひなたちをそだてていました。そこへ、森のほうから、キツネが背なかの毛をさかだてて、こわい顔をしながら、木の下にやってきて、言いました。

「やい！ あんた、あたしの木の上に巣をつくっているね！ 死にたくなかったら、今すぐひなを一羽、下におろすがいい！」

おそろしくなったコウノトリは、しかたなく、ひなを一羽巣から下ろしました。キツネはあつというまに、ひなをぱくつと食べてしまいました。

つぎの日、キツネは、きのうよりもっとこわい顔をしてやってきました。ふるえあがったコウノトリは、またひなを一羽巣から下ろしました。

キツネが帰ったとたん、カラスが空をカーカーと鳴きながらとんできて、コウノトリに言いました。

「おまえさんは、そんなに長くてとがたくちばしを持っているのに、バカだなあ。『今すぐそこにおりていって、そのずるがしこい脳みそを、このくちばしでつつき出してやるぞ！ 一羽も食べたんだから、もうたぐさんだろう！』と言ってやれば、ずるがしこいキツネをこわがらせてやれるのに」

つぎの日、キツネがきのうよりもっとこわい顔をしながら

やってきて、

「さあ、もう一羽、あたしによこすんだ！」
と大声で言いました。

コウノトリは、おそろしくて首がふるえるほどでしたが、一羽だけになったひなのことを思うと、しっかりと二本の足で木のえだをつかんで、こう言いました。

「帰ってちょうだい！ あんたはわたしのひなを二羽も食べたんだから、もうまっぴらごめんだ！ 今すぐそこへ下りて行って、あんたの脳みそをつきだしてやる！」

まさか、コウノトリにそんな勇気があるとは思ってもいなかったの
で、キツネはこわくなって逃げ帰りました。そして、こう考えました。

「ははあ、あんなせりふを教えたのはカラスのやつだ。カラスめ、おまえこそつかまえて食べてくれよう！」

そして、キツネは川岸で体にゴミをいっぱいつけると、横になって死んだふりをしてカラスが来るのを待っていました。ところが、しばらくそうしているうちに、お日さまがぼかぼかと気持ちよく、いつの間にか眠ってしまいました。

「痛い!!」

いきなり、片目が、さされたように痛みました。飛び起きてみると、カラスに片方の目をつつかれていました。腹を立てても、カラスはとつくのむかしに姿を消していました。

その日から、キツネは、だれをどうやってだましてやろうかという

ことばかり考えてくらすようになりました。

ある日、森を歩いていると、シラカバの木の上にオオライチョウがとまっていました。キツネはオオライチョウに話しかけました。

「かわいいそうに！ そんなに大きな頭で、あんたは何を考えているの？」

「そういう君は、何を考えて、どこへ行こうとしているのかね？」

「見てのとおり、あたしは片目をなくすほど、世の中のことをいろいろ見てきたんだよ。『人目につかない穴』という国に行けば、何もしないで何でも食べられる。そこに向かっているのさ」

オオライチョウは、おもしろそうだな、と思って、こう言いました。

「ぼくも連れて行っておくれ。ぼくも楽をしてもらいたい」

「それじゃ、木から下りて、あたしの後についておいで」

オオライチョウは、シラカバの木から下りて、キツネといっしょに旅をすることにしました。

しばらく歩くと、二人はタカに会いました。

「かわいいそうに！ 頭をそんなにふってあたりを見回して、あんたは何を考えているの？」

「そういう君たちこそ、どうしていっしょに歩いているのかね？」

「あたしたちは、『人目につかない穴』という国に向かっているのさ。そこでは横になったまま、何でも食べほうだい！ 何もしなくてもいいのさ」

「わたしも楽をしてくらしたい！ いっしょについて行ってもいい

かい？」

タカは喜んで木から下りて、ふたりの後についてきました。

また歩いていくと、つぎにフクロウに出会いました。

「かわいそうに！ そんなに頭をぐるぐる回して、あんたは何を考えているの？」

「お前さんがたこそ、何を考えていっしょに歩いているんだい？」

「あたしは片目をなくすほど、この世を生きてきたんだ。あんたみたいにネズミをさがして食べるより、『人目につかない穴』という国で、何もしないで、ただ横になって食べてくらすのがいいと思って、旅に出たのさ」

「それはいい。わしもいっしょに行こう」

しばらく歩くと、シヤコに会いました。

「かわいそうに！ 林ややぶのなかでえさを探し回るなんて！ 何を考えて生きているの？」

「君たちこそ、何を考えてくつついて歩いているの？」

「あたしたちは、頭がくるったツルのように、草むらをうろうろしたくないのさ。だから、『人目につかない穴』という国で、横になったままで楽をして食べようと旅に出たのさ」

「ふしぎな国だね。ぼくは楽をして食べたいとは思わないけれども、その『人目につかない穴』という国は一度見てみたいから、いっしょに行くよ」

しばらく行くと、ある山のおもとに着きました。

「さあ、みんな！ 『人目につかない穴』に着いたよ。ひとりずつ穴のなかに早く入るんだ。ほかのけものたちに足あとを見られたらたいへんだから、どんどん入って」

キツネは一番あとから穴のなかに入ると、ひとかたまりになっている鳥たちを見て、大声でわらいました。

「バカだね、あんたたちは！ 『人目につかない穴』というのは、あたしの穴だよ。これで横になったまま楽をして食べられるというものさ」

そういうと、キツネは、はじめにタカをつかまえて食べてしまいました。つぎの日はフクロウを食べ、そのつぎの日はオオライチョウを食べ、三日目にシヤコをつかまえて食べようとする、シヤコがこう言いました。

「キツネの姉さん。こんな小さなぼくを食べても、おなかはいっぱいにならないよ！ ぼくを逃がしてくれたら、あんたを一回はわらわせて、一回はおなかをいっぱいにして、一回はぞくぞくさせてあげるよ」

キツネは考えました。

「それもそうだ。こんな小さな鳥を食べても、おなかはいっぱいにならない」

そこでキツネはシヤコに言いました。

「じゃあ、逃がしてやる。でも、もし、あたしをだましたら、どこに行こうと、見つけ出して食べてやる！」

キツネはシヤコをはなして、後をつけていきました。

とちゅうで、ふたりは母親と子どもが牛車でやってくるのに会いま
した。女は子供と教会に行くところで、牛車には神父さまにあげるた
くさんのおみやげがつんでありました。シヤコは道のまん中に飛び出
して、けがをしているふりをしました。それを見て、女は思いました。

「しめしめ！ あの死にそうなシヤコをつかまえたら、神父さまには
すてきなおみやげになるわ」

女がシヤコをつかまえようとして、牛車をおりたすきに、キツネは
車の上に乗れこんで、おみやげを全部たいらげてしまいました。おな
かがいっぱいになったキツネが、森の中で気持ちよさそうに舌なめず
りをしているところに、シヤコが飛んできて聞きました。

「どう？ おなかは、いっぱいになった？」

「ええ。両目があったときでも、こんなにおなかがいっぱいになった
ことはないくらい」

キツネとシヤコは旅を続けました。ひとりの太ったお百姓さんが、
馬にすきをひかせて畑をたがやしているところにやってきました。シ
ヤコは馬の首についているくびきの上にとまりました。それを見たお
百姓さんは、持っていた小さいおのをシヤコのほうに投げました。す
ると、馬がびっくりして頭を上げたので、おのが首に当たって馬は死
んでしまいました。それを見ていたキツネはガラガラ笑いました。

「小さな鳥を欲しがって、大きな馬を死なせてしまった！」

シヤコが飛んできて聞きました。

「どう？ 笑った？」

「ええ。笑った、笑った」

ある村につきましました。シヤコはキツネをお百姓さんの物おきに入れ
てこう言いました。

「ここでじっとしていて」

シヤコは、物おきから出て、死んだふりをしました。すると犬が何
匹も集まってきました。シヤコは逃げ出して、物おきの中に飛びこみ
ました。すぐうしろから犬たちが追いかけてきます。キツネは犬を見
てふるえあがり、窓から逃げようとしたが、犬たちにしっぽの先
をかじりとられてしまいました。森のなかでガタガタふるえているキ
ツネのところにシヤコが飛んできて、こう言いました。

「さんざんみんなをだまして、悪いことをしたばちさ！ ずるがしこ
いキツネさん。さよなら！」

そのうち、かじりとられたしっぽの先に白い毛が生えてきました。

キツネのしっぽの先が白いのは、そのときからなんですって。

チャーチャハーンと化け物

むかしむかし、チャーチャハーンという、頭がよくて勇気のある人がいました。このチャーチャハーンは、人の物をぬすんだことも、あばれて物をこわしたことも、道ばたで横になって休んでいる牛に指一本ふれたことも、起こしたこともないという、まじめで正直な人でした。その上、こわいもの知らずでした。

ある夏の日、チャーチャハーンは狩りに出ました。歩いていると、黒い丘の上に、ひとかかえもある太いカラマツの木が目に入りました。見ると、その木にはびっくりするほど大きなキノコが生えていました。チャーチャハーンは、そのキノコが、おなかにきくと知っていたので、家を持って帰ろうと思って、右手でたたきました。すると、どうしたことでしょう！ 手がキノコにくっついてしまったではありませんか！ チャーチャハーンはびっくりして、左手でたたきました。すると、なんと、左手までもびったりくっついてしまいました！ 今度は足でけりました。すると足もくっついてしまいました。あとはもう頭しか残っていないので、キノコに頭つきをくらわしてみたら、おでこもくっついてしまいました。こおっている肉がなべの中で煮えあがるほどの、とてもとても長い間、そのままのがたでいました。しばらくすると、木立をかきわけて、化け物のアラー・モグスが出てきて、げらげら笑いながらこう言いました。

「八日も九日も食べていないほど腹ぺこだ！ まさか、あの有名なチ

ャーチャハーンが、おれさまのまほうのわなにかかっってしまうとはな！」

こう言つて、舌なめずりをして、馬のしっぽほど太くて大きな黒いひげを右へ左へなめ上げました。アラー・モグスがカラマツに近づいて鼻から大きな息をかけると、手も足も頭もくっついていたチャーチャハーンの体は、あつという間にキノコから、はなれました。そこをアラー・モグスはさつとつかんで、皮ぶくろの中に入れました。チャーチャハーンは、ナイフを持っているのを思い出して、それでふくろの底を切つて逃げ出しました。さすがのアラー・モグスも、チャーチャハーンが逃げたことには気がつきませんでした。

チャーチャハーンは、森の中に逃げこむと、服の中に枯れ枝をたくさんつめこんで、横になってアラー・モグスが戻ってくるのを待っていました。やがて、アラー・モグスがチャーチャハーンを探しに戻ってきました。

「小虫め！ ここにかくれていたか！」

そう言いながら、アラー・モグスはチャーチャハーンをけりました。すると、枯れ枝がばきばきと音を立てました。

「おい、お前！ ろっこつが八本も九本も折れたぞ！」

と言つて、アラー・モグスはチャーチャハーンを家に運びました。そして、子供たちに言いました。

「子どもたちや！ 父さんが帰ってくるまでに、こいつをなべで、にしておいておくれ！」

そう言うと、アラー・モグスは出かけていきました。

そこで、チャーチャハーンは少しばかり考えてから、こう言いました。

「ねえ、君たち。お風呂に入ってからここに来て、ならんでおくれ。一番きれいになった子、白くなった子に、木のスプーンを作つてあげよう」

化け物の子供たちは、おたがいに話しあつてから、お風呂に入ると、一列にならびました。そこでチャーチャハーンは言いました。

「ぼくはナイフもおもも持っていないから、木のスプーンを作るのはむずかしいなあ。ねえ、君たち。お父さんの一番よく切れるなたをぼくに貸してくれないか？」

一番上の息子が、一番よく切れるなたをチャーチャハーンに持つてきてくれました。チャーチャハーンはそれを待つていました。そして、なたを手にしたとたん、さつと一ふり。九人の化け物の子供たちの首を切り落としてしまいました。

チャーチャハーンは、九つの頭をねているようにベッドに並べ、九つの体をなべに入れて煮ました。そして自分は、だんろの後ろのかべに穴をあけて、そこから外へ出て、火かき棒を熱くして待ちかまえていました。

そこへ、アラー・モグスが帰つてきて、子供たちに声をかけました。

「ほら、起きろ！」

アラー・モグスはなべから肉をとり出して食べ、それから、しんぞ

うを食べました。

「ありや！ 一つのまにチャーチャハーンは、おれさまの身うちになつたんだ？ 身うちのような、ふしぎな感じがしてきたぞ。しんぞうもどきどきしてきたぞ。それにしても、子供たちはどうして起きてこないんだ？」

そう言いながら、アラー・モグスがふとんをはぐと、九人の子どものたちの頭がころころと床に転がりました。

「そうだったのか！ それで変な気分になつたのだ！ チャーチャハーン!!」

アラー・モグスが大声でさげぶと、人間の声が家の外から聞こええました。

「ここだよ！」

アラー・モグスは、すぐさま外に出て、家のまわりをさがしましたが、チャーチャハーンの姿はどこにも見えません。

「チャーチャハーン!!」

すると、今度は家の中から、

「こつちだよ！」

声が聞こえたので、アラー・モグスはすぐに家の中にとびこみました。

「チャーチャハーン!! どこだ?!」

「ここだ、ここだ！ だんろの後ろの穴だ！」

それを聞いたアラー・モグスとはんできて、頭を穴の中につっこみ

ましたが、なかなか入れません。

「後ろを向いて入ってみたらどうだい？ そうしたら、ぜったいに入れるぞ」

アラー・モグスが、後ろを向いておしりを入れたとたん、チャーチヤハーンは真っ赤に焼けた火かき棒を化け物のおしりにつきさしました。

すると、アラー・モグスは、

「おれの両手のほねで舟のかいをつくり、背中のはねで舟をつくれ。すねのほねで柱をつくり、頭のはねでなべをつくり、目の穴のところ
で茶わんをつくれ」

と言い残して、死にました。

この世で一番強いのは？

むかしむかし、あるところに、タール・タールというおばあさんがいました。

ある冬の日、タール・タールばあさんは、みずうみに水をくみに行きました。帰るときになって、若いころを思い出し、スケートを始めました。ところがそれは長くつづきませんでした。足がすべって、氷の上で転んでしまい、すぐに服が氷にくっついて立てなくなったのです。そこで、氷に声をかけました。

「氷さん、氷さん。あんたは強いのかい？ だから、わたしをはなしてくれないのかね？」

すると氷が言いました。

「あたり前だろう！ ぼくは強いぞ！」

「それなら、どうしてお日さまは、あんたをとかしてしまうんだい？」

「それは、お日さまの方が強いからじゃないの？」

そこで、タール・タールばあさんは、お日さまに声をかけました。

「お日さま、お日さま。あなたは強いのかい？」

「当然だろう！ おれは強いよ！」

「それなら、どうして雲さんは、あんたをかくしてしまうんだい？」

「それは、雲のほうが強いかもね」

そう言われて、タール・タールばあさんは、雲に声をかけました。

「雲さん、雲さん。あんたは強いかね？」

「そのとおり。おれは強いぞ！」

「それなら、どうして風さんは、あんたをふきとばしてしまうのさ？」

「それは、風がおれより強いからじゃないか？」

「タール・タールばあさんは、つぎに風に声をかけました。

「風さん、風さん。あんたは強いかね？」

「あたり前だよ。おれが一番強いさ！」

「それなら、どうしてあんたは、自分の前にある高い山を通れないんだい？」

「そうだな、山のほうが強いからかもね」

「タール・タールばあさんは、今度は山に声をかけました。

「山さん、山さん。あんたは強いかね？」

「そうだよ。おれが一番強いよ！」

「それなら、どうしてネズミさんはあんたを通ってしまうんだい？」

「それは、ネズミのほうが強いからじゃないのかなあ？」

「タール・タールばあさんは、今度はネズミに声をかけました。

「ネズミさん、ネズミさん。あんたは強いかね？」

「うん、もちろん！ ぼくが一番強いよ！」

「それなら、どうして、あんたはキツネさんにつかまって食べられてしまうんだい？」

「それは、キツネさんのほうが強いからだね！」

「タール・タールばあさんは、今度はキツネに声をかけました。

「キツネさん、キツネさん。あんたは強いかね？」

「そうよ！ あたしが一番強いわよ！」

「それなら、どうしてあんたは人間につかまって、毛皮をとられるんだい？」

「人間が、もつと強いからよ！」

「そこへ人間が歩いてきたのを見て、キツネはにげてしまいました。

「タール・タールばあさんは、近づいてきた人に声をかけました。

「人間さん、人間さん。あんたは強い？」

「そうだよ。一番強いのはわたしだよ！」

「あなたは どうして強いのか？」

「考える力とまっすぐな心、そして力強く生きる気持ちを持っているから、強いんだよ」

「そう答えると、その人は氷にくっついたタール・タールばあさんの

コートをはひっぱって、ばあさんを助けてくれましたとさ。」